

Title	ワークショップ「異言語環境で日本の小説を読むー葉山嘉樹『セメント樽の中の手紙』ー」ハンガリー語訳の問題点・ハンガリーのプロレタリア文学、労働者の状況を題材とする文学
Author(s)	Fittler, Áron
Citation	多言語翻訳：葉山嘉樹『セメント樽の中の手紙』．2013, p. 67-67
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/61309
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

2015年2月13日

ワークショップ「異言語環境で日本の小説を読む―葉山嘉樹『セメント樽の中の手紙』―」
ハンガリー語訳の問題点・ハンガリーのプロレタリア文学、労働者の状況を題材とする文学

大阪大学言語文化研究科博士後期課程2年 フィットレル・アーロン

1. 翻訳の問題点・難解な箇所

「長屋」

→ 日本では労働者の住宅をそのまま意味するが、ハンガリーの読者はこの言葉だけではわからない ⇒ 「労働者住宅である長い建物」と説明を加えて訳した。

「立派にセメントとなりました」

→ 気持ちがハンガリーの読者に伝わるか(そもそも、解釈するときこれという一つの気持ちを提示できるか)。皮肉的、グロテスクな印象を与えないか。

※ 「経帷子」

→ キリスト教文化圏に属するハンガリーでも、死者に着せる服装があるため、翻訳・受容は問題ない。

● 表現方法の相違

「Nセメント会社の、セメント袋を縫う女工」

→ これほど詳細な言い方はハンガリー語で普通ではない ⇒ 「Nセメント会社の裁縫女工」

「骨も、肉も、魂も、粉々になりました」

→ ハンガリー語でこの形だと不自然 ⇒ 「心身粉々になりました」と訳した。

2. ハンガリーのプロレタリア文学、労働者の状況を題材とする文学

Gelléri Andor Endre (グレーリ・アンドル・エンドレ、1906～1945)

- 『運搬職人たち』(A szállítóknál, 1930年) → 運搬職人の毎日の様子が題材である。生活の困難さを描き、俗語を多用する。高校(中学校)の教科書に載っている。
- 『生命』(Élet, 1927) → 洗濯所の労働者の労働環境を描く。蒸気機の火夫は、猛暑によって体調をくずすが、上司に仕事を続けさせられ、最後に倒れて死ぬ。